京都大学教育研究振興財団助成事業
成　果　報　告　書

平成22年12月10日

財団法人京都大学教育研究振興財団
会長　辻　井　昭　雄　様

所属部局　霊長類研究所

職　　名　所長

氏　　名　松沢哲郎

事業区分	平成22年度・シンポジウム等開催助成
事業内容	「霊長類考古学の展望」シンポジウム開催
開催期間	平成22年9月18日　～　平成22年9月20日
開催場所	京都大学妙高高原笹ヶ峰ヒュッテ
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料　□ 無　■ 有(プログラム)

事業に要した経費総額	(飲食・宴会経費を除いた額)	2,123,065円
うち当財団からの助成額		1,500,000 円
その他の資金の出所	(機関や資金の名称　科学研究費補助金　特別推進研究	

経費の内訳と助成金の使途について

費目	金額 (円)	財団助成充当額 (円)
旅費	2,123,065	1,500,000
合計	2,123,065	1,500,000

平成２２年度京都大学教育研究振興財団
シンポジウム等開催助成による成果の概要

申請者（代表者）：京都大学霊長類研究所・所長　松沢哲郎
開催期間：2010 年 9 月 18 日から 20 日
（事業期間：平成 22 年 9 月 1 日から 10 月 31 日）
場所：京都大学妙高高原笹ヶ峰ヒュッテ（長野県妙高市）
参加者：6 カ国から 17 名が参加、以下に氏名（所属・国籍・専門）を列挙する

松沢哲郎（京都大学霊長類研究所・日本・比較認知科学）
ウィリアム・マグルー（ケンブリッジ大学・イギリス・チンパンジーの文化行動）
ドロシー・フラゲージー（ジョージア大学・アメリカ・オマキザルの心理と行動）
エリザベタ・ビザルゲルギ（イタリア認知科学工学研究所・イタリア・オマキザルの石器使用）
リンダ・マーシャント（マイアミ大学・アメリカ・チンパンジーの文化行動）
ブライアン・ヘア（デューク大学・アメリカ・チンパンジーとボノボの心理と行動）
ディートリッヒ・スタウト（エモリー大学・アメリカ・石器使用の進化と脳内基盤）
クリケット・サンズ（ワシントン大学・アメリカ・野生チンパンジーの道具使用）
ドラ・ビロ（オックスフォード大学・ハンガリー・比較認知科学）
クローディア・ソウザ（新リスボン大学・ポルトガル・チンパンジーの心理と行動）
林美里（京都大学霊長類研究所・日本・比較認知発達）
アンナ・アルビアッチ・セラーノ（マックスプランク進化人類学研究所・イタリア・比較認知科学）
カテリーナ・コープス（ケンブリッジ大学・オランダ・野生チンパンジーの行動と生態）スザーナ・カルバーリョ（ケンブリッジ大学・ポルトガル・野生チンパンジーの石器使用）ブライアン・ストーン（ジョージア大学・アメリカ・オマキザルの心理と行動）
チン・リュウ（ジョージア大学・アメリカ・野生オマキザルの石器使用）
ジュリア・シリアーニ（イタリア認知科学工学研究所・イタリア・野生オマキザルの石器使用）
杉山茂（静岡大学・日本・比較文化歴史学）
廣澤麻里（京都大学霊長類研究所・日本・チンパンジーの心理と行動）

概要：

図 1　笹ヶ峰ヒュッテの屋外デッキに並んだ参加者の集合写真

図 2　アットホームな雰囲気の中で著名研究者と若手研究者の相互交流がおこなわれた

「霊長類考古学の展望」という主旨のもと、霊長類の道具使用などに関連する研究者を招いて、本シンポジウムを企画した。2010 年 9 月 12 日から京都大学にて開催された国際霊長類学会には、世界 57 か国より約 1,000 名の参加があった。この機会を利用することで、ヒトを含む霊長類の道具使用について、多様な研究背景をもつ参加者を募り、包括的な議論をおこなうことができた。国際霊長類学会の学術プログラムの終了後、9 月 18 日に京都から会場となるヒュッテへと移動し、オリエンテーションなどをおこなった。19-20 日の両日は、午前中に個別の活動やミーティングなどをおこない、午後には野外でのフィールド調査や飼育下での実験的研究から得られた最新の成果について、それぞれの参加者が発表をおこなった。発表と質疑応答に引き続いて、著名研究者がリードする形式で総合的な討論をおこなうとともに、自炊の食事や食後の時間などにも、各所で活発な議論が続いていた。野生で道具使用を頻繁におこなうことが知られているチンパンジーだけでなく、南米にすむオマキザルの石器使用や、ヒトの石器使用の脳内基盤を調べる研究者なども参加し、ヒトを含む霊長類の道具使用の進化について幅広い話題が提供された。従来、ヒトの歴史を探るために用いられてきた考古学的な解析手法を、ヒト以外の霊長類にも応用するとともに、実際の行動観察と併用することで、ヒトの知性の進化にせまる研究の流れの中でも、画期的な第一歩となった。大学院生やポスドクなどの若手研究者と、世界的に著名な研究者の双方が参加し、ヒュッテで生活をともにすることで、各自の研究とその成果や将来の展望などについて話し合う絶好の意見交換の場となった。今後の参加者相互の研究協力を推進する上でも、多様な分野の研究者が一同に会しておこなった本シンポジウムの意義は大きいと思われる。本シンポジウムは、豊かな自然に囲まれた京都大学妙高高原笹ヶ峰ヒュッテにおいて合宿形式でおこなわれ、ヒュッテ初の国際学術会議の開催となった。先進諸国で唯一ヒト以外の野生霊長類が生息するという特長をもつ日本における、自然学フィールドセミナーとしての側面もあり、実際にヒュッテ周辺で野生のニホンザルやホンドキツネをはじめとする多様な動植物を観察することができた。